



LHC-ATLAS実験における 多変量解析によるZ粒子τレプトン対崩壊の研究

日本物理学会第67回年次大会@関西学院大学 27pFA-5 2012 Mar 27th Tue. 14:30(JST) -



望月一也、金信弘,受川史彦,原和彦,塙慶太 筑波大学数理物質科学研究科



LHC-ATLAS

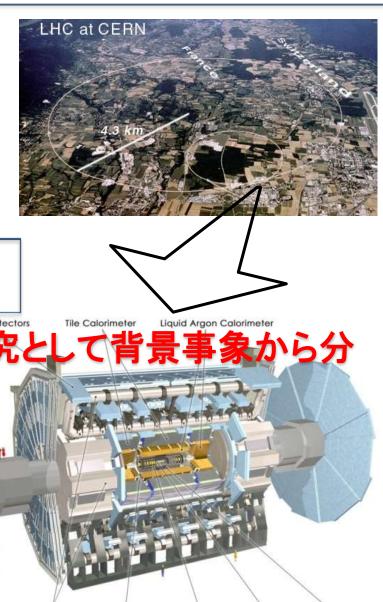
- ▶ ヒッグス粒子探索, BSM(SUSY, 余剰次元)
- ▶ 陽子・陽子衝突型円形加速器
- $> \sqrt{s} = 7 (14) \text{ TeV}$
- $L = 3.6 \times 10^{33} (1.0 \times 10^{34}) \, s^{-1} \text{cm}^{-2}$



目的:ヒッグス粒子探索に向けた研究として背景事象から分

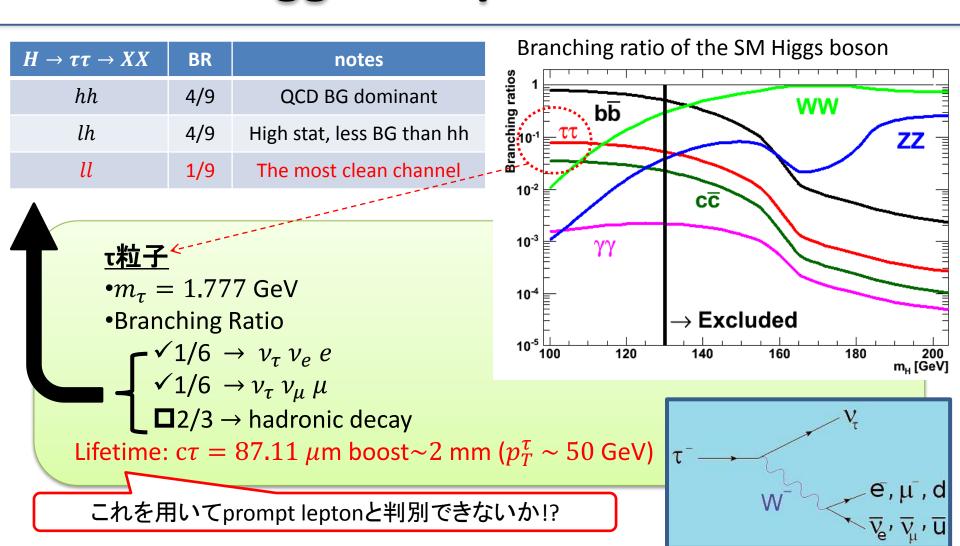
離して、 $Z \rightarrow \tau_e \tau_\mu$ を観測する

- ヒッグス粒子
- 横方向衝突径数 d_0
- 多変量解析(MVA)と分類器
- 結果
- Summary



Toroid Magnets Solenoid Magnet SCT Tracker Pixel Detector TRT Tracker

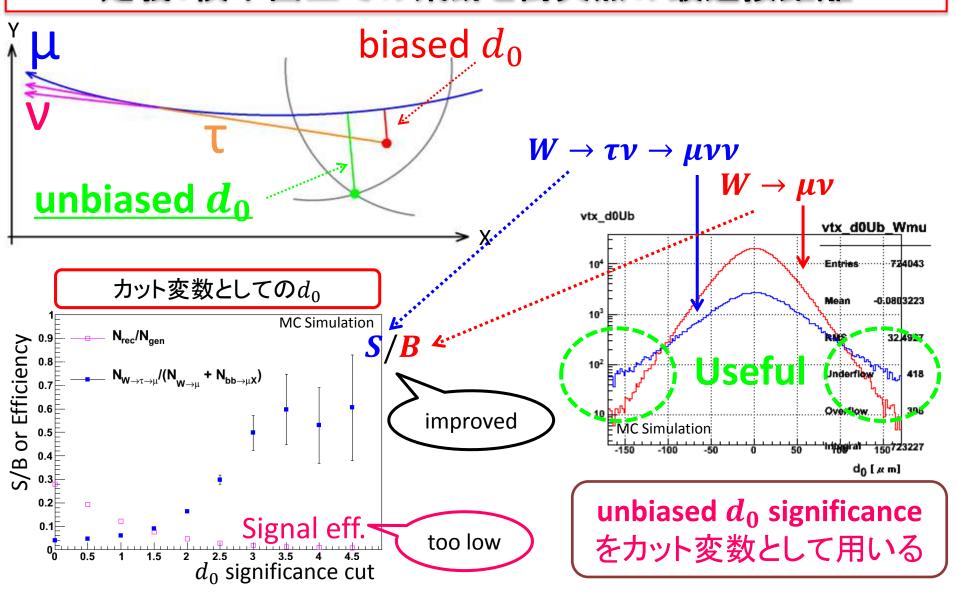
Higgs & Leptonic au ID



ATLASではカットベースの $H \to \tau\tau \to \ell\ell$ が評価されており、多変量解析(MVA)を用いた方法も検討されているが τ のlifetime情報は使われていない。lifetime情報を入れた多変量解析でS/B向上を目指す。

Transverse impact parameter d_0

定義:横平面上での飛跡と衝突点の最近接距離

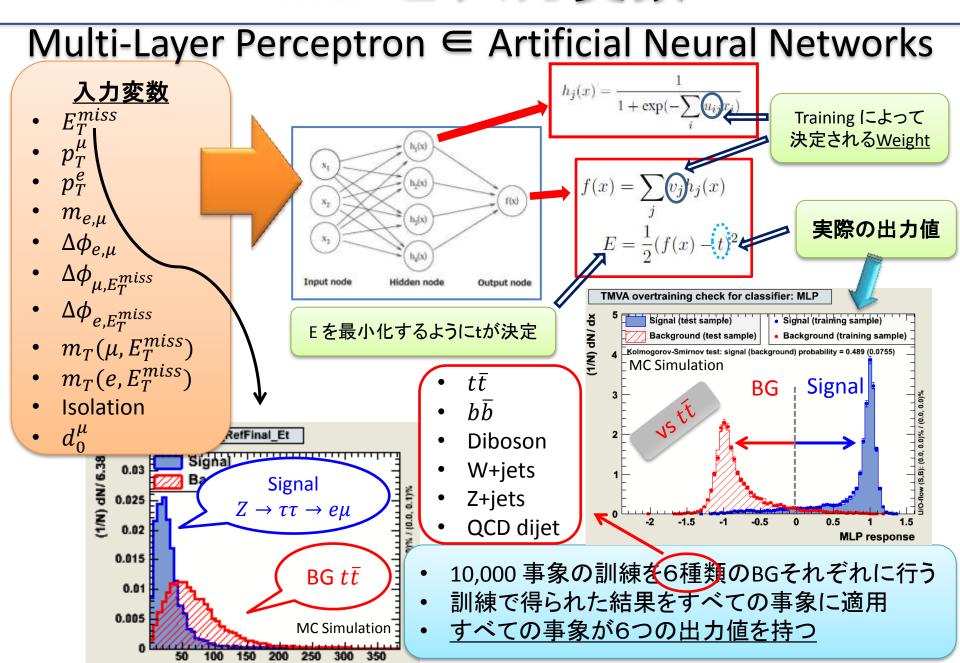


Analysis Flow

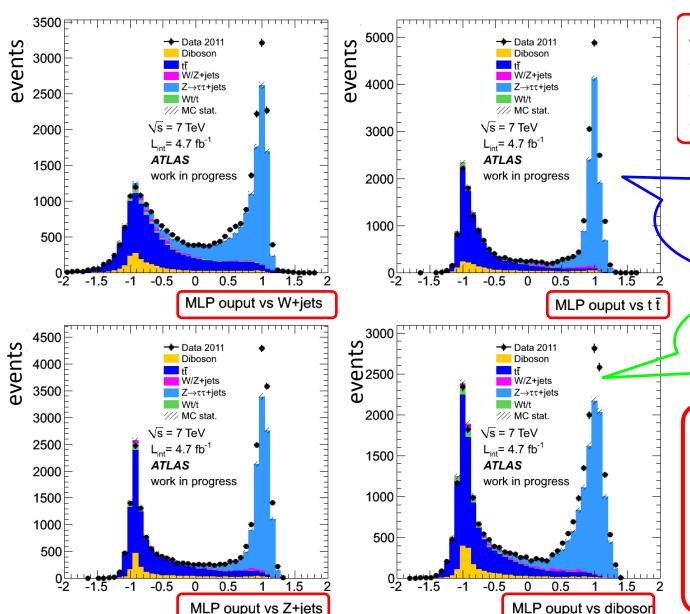
- 1. 2011 full dataset (4.66 fb-1)
- 2. $N_e = N_\mu = 1$
- 3. MVA分類器のトレーニング(6つのBGを仮定) 次ページに示す E_T^{miss} , $m_{e\mu}$ など様々なKinematic variablesを使用
- 4. Isolation requirements
- 5. $Q_{\mu} \times Q_{e} = -1$
- 6. MVAの出力値を全イベントに持たせる
- 7. MVA出力値によるセレクション
- $MVAにd_0$ を用いる前後での結果を比較

分類器はMLP、TMLP、BDTを比較検討中

MLPと入力変数



MLP 出力値



事象選別

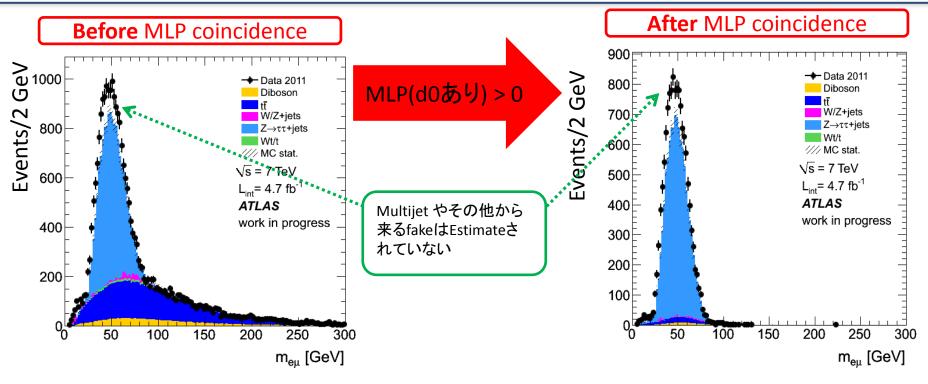
- $N_{\mu} = N_e = 1$
- lsolation for e, μ
- $Q_{\mu} \times Q_{e} = -1$

Signal→+1 BG→−1 よく分離されている

> MCで見積もりき れないBGが存在

仮定した背景事象に対する出力値が正となるイベントのみ選択する

結果



Number of events	Before MVA	MLP w/o d0	MLP w/ d0
MC Ztautau expectation	11218	9729	9836
MC other BG expectation*	11846	768	732
S/B	0.946	12.7	13.4

*QCD BGの評価は含まない

 d_0 によりS/Bは約6%向上した

Summary

Conclusion

 d_0 を用いた多変量解析を新たに導入し $Z \to \tau_e \tau_\mu$ と背景事象の分離を評価した

- d₀を組み込まない場合よりS/Bが約6%向上し、また期待できる背景事象分離能力が得られた(QCDは未評価)。

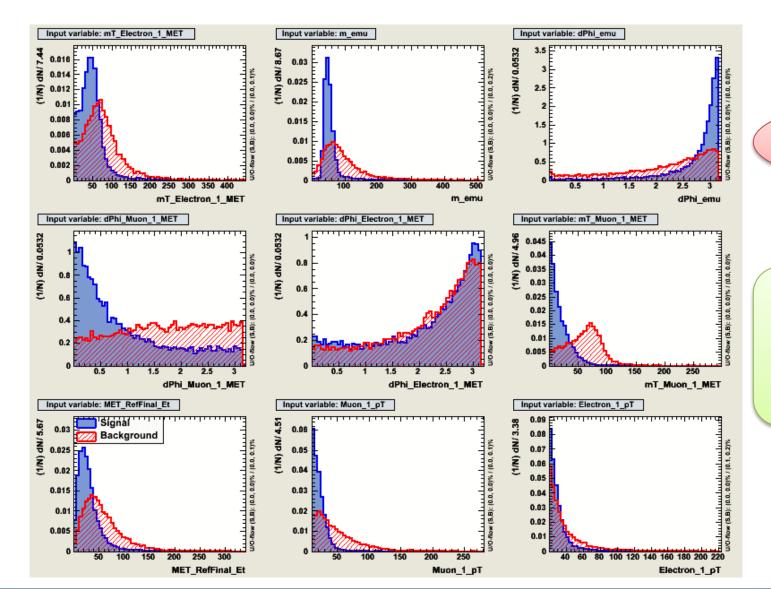
<u>Plan</u>

- Dataを用い、QCDから来るBG Expectationを進行中
- 本解析をHiggs粒子探索に適用
 Higgs MCをsignalとしてトレーニング→カット解析との比較
- 最終判別を最適化
- 過訓練など、解析条件の最適化

ありがとうございました

BACKUP SLIDES

MVA input variables distribution



vs W+jets

Input variable distributions except d_0 and isolation.